

SWAN

MAGAZINE

やっぱり、バレエが大好き。

[スワン・マガジン]

2007 夏号

Vol.8 Summer

特集 ❖ バレエの
新しい扉を開こう!
Noism07 金森 穰

安珠の Photo Essay 白井 剛

シンフォニック・バレエへの挑戦!

服部有吉×金 聖響

[No.07プロジェクト]

イリ・ブベニチェク

マリ=アニエス・ジロ

竹島由美子

[Long Interview]

アレクサンドラ・フェリ

パリ・オペラ座

若きスター候補は誰?

[連載 バレエ漫画]

まいあ Maia
—SWAN act II—
有吉京子

[パリ・オペラ座レビュー] ブルースト&ドン・キホーテ / バレエ学校公演

[プリンシパルに聞く] ミラノ・スカラ座バレエ団 / オーストラリア・バレエ団

新国立劇場バレエ団「ドン・キホーテ」を観に行こう!

[巻末特別付録]

SWAN 扉絵集「ベジヤール振付作品」

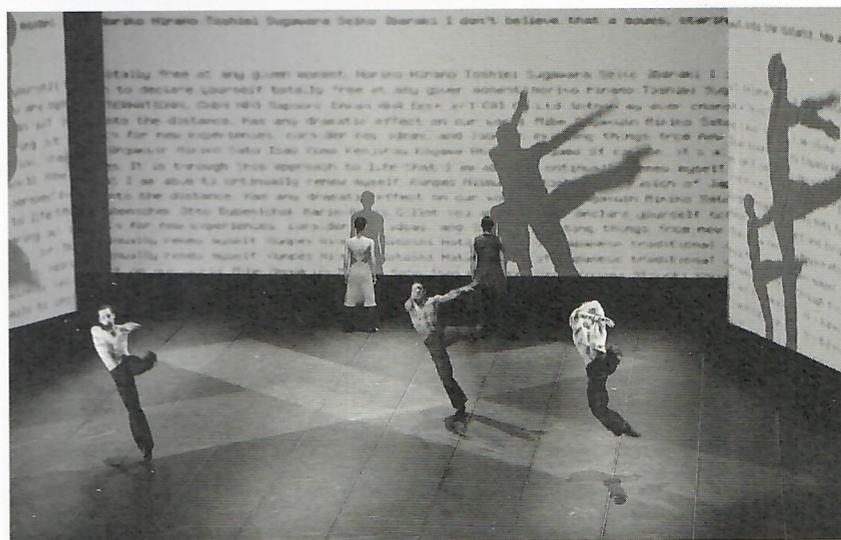
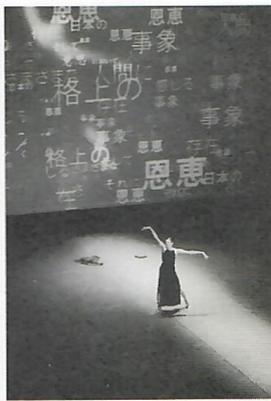
コンテンポラリー・アートの
新たな領域を拓く!!

融

YUH
'07

Mayu Fujimoto
文・藤本真由

Toshihiko Kohno
写真・河野利彦



北海道の地を舞台に、現代美術とバレエのクロスオーバーを図る「融——YUH」プロジェクト。1999年「ドイツにおける日本年」の際、札幌在住の現代美術家・端聡^{はたとし}は、ドイツ・ハンブルク市の運河下トンネル内で、多彩なジャンルのアーティストとのコラボレーションから成るパフォーマンスを成功させた。このときパフォーマンスに参加していたのが、当時ハンブルク・バレエ団に在籍していたイリ・ブベニチェク。ダンサー、そして振付家としても活躍するイリと端との出会いは「融」シリーズとして結実し、2002年には北海道・岩見沢市で、2004年からは札幌市内で、他ジャンルのコラボレーションを通じてコンテンポラリー・アートの領域を拓く実験的なパフォーマンスが上演されてきた。

4度目となる今年も、東京・新国立劇場中劇場での公演も実現し、2004

年から参加しているパリ・オペラ座バレエ団エトワール、マリィアニエス・ジロや、札幌出身で今回が初参加となるドレンデン・バレエ団プリンシパル、竹島由美子らが登場。端の映像と平面作品、イリの双子の兄弟オットーの手がけた音楽、アフリカン・ドラムの生演奏、そしてイリの振付とが渾然一体となって織り成す「レクイエム」や、ジロがヒップホップ・ダンサーを起用して自ら振付けた「Les differences」、イリが自ら振付けジロと踊ったデュエット新作に加え、ジロが踊るカロリン・カールソン振付のソロ作品「DIVA」など、充実したプログラムを繰り広げた。

この意欲的なプロジェクトに精力的に関わってきたイリ・ブベニチェク、マリィアニエス・ジロ、そして竹島由美子の3人に、ダンスのコンテンポラリーな展望について話を聞くことができた。

(写真左上より)
デュエット新作
「DIVA」
「イン・ザ・ミドル・サムホット・エレヴェイテッド」
(写真下)
「レクイエム」
©須田守政

ストーリーよりむしろ、人間の感情を表現したい

「融」プロジェクト誕生のきっかけとなった、1999年のハンブルクでのパフォーマンスにパフォーマンスの一人として参加し、2002年からの同プロジェクトにおいて、アート・ディレクター端聡と共にキーパーソンとして活動してきたイリ・ブベニチュク。今回の公演でも、プログラム構成から大きな役割を果たし、振付作品「レクイエム」を発表、マリアニエス・ジロとデュエット新作を踊るなど、八面六臂の活躍を見せた。

「この世で芸術だけが、人の魂にふれ、心に届くものだと思う」

「シリーズ4度目となる今回は、東京での公演も初めて実現しましたが、プログラムのにも作品的にも、今まででもっとも充実した舞台をお見せできたのではないかと思います。出演陣もすばらしいダンサーが揃いましたし、できあがった作品について、自分としては大いに誇りをもっています」
振付家としてますます注目を集

める存在となってきたブベニチュク。自作においては「ストーリーよりもむしろ、人間の感情を表現したい」と語る。

「いつも考えているのは、この世で芸術だけが、人の魂にふれ、心に届くものであるということなんです。個人的なことを舞台上で語ってゆくわけではないのですが、感情を表現する上では、やはり僕自身の人生における経験をあれこれ使って振付けている部分がありますね。何らかの感情を与えられることによって、作品を観終わった後、観客一人ひとりが自分だけのストーリーを形作っていつてくれることが理想なんです」

影響を受けた振付家としては、ノイマイヤー、フォーサイス、キリアン、エックといった名前を挙げた。

「人間感情の表現ということではやはり、ジョン（ノイマイヤー）に学んだことは非常に大きかったですね。それから、数多くのダンサーと共に仕事をする術や、それぞれのキャラクターを発展、展開

[Jiri Bubenicek]

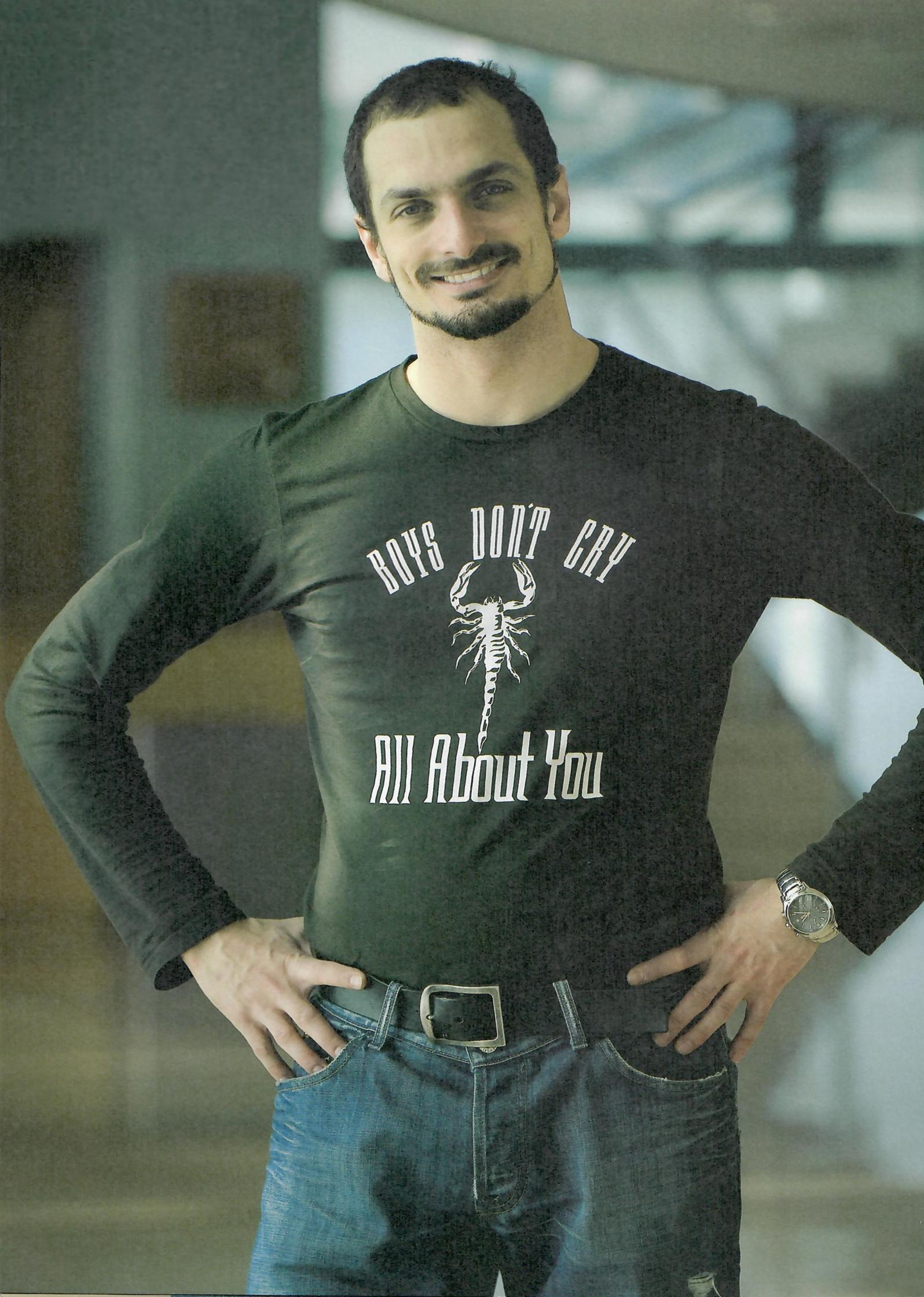
ポーランド生まれ。ブラハ・ダンス・コンセルヴァトワールで学び、92年、ローザンヌ国際バレエ・コンクールで入賞。93年ハンブルク・バレエ団に入団。95年にソリスト、97年にプリンシパルに昇格。「ニジンスキー」タイトルロールをはじめ、数多くのノイマイヤー作品で重要な役割を果たす。02年ブノワ賞ベスト・ダンサー賞を受賞。ダンサーとして活躍するかたわら、振付家としても精力中に活動しており、受賞経験多数。06年ドレスデン・バレエ団にプリンシパルとして移籍。

「自分には独自のムーヴメントのスタイルがある、と自負しています」

させてゆく方法についても多くのことを学びました。ただ、自分は独自のムーヴメントのスタイルをもっていると思っていますし、これまでこの世に存在しなかったような新しい動きを振付け、表現してゆきたい。そのためにも、常にオープンマインドで、芸術作品だけでなく、街角で見かけた情景や人々など、すべてのものにインスピレーションを感じられるような心がけているんです」

昨年、13年在籍したハンブルク・バレエ団からドレスデン・バレエ団に移籍したことで、環境も一変した。

「ダンサーとしてのキャリアが終わる前に大きな変化がほしいと考えて移籍したのですが、新しいレパートリーを日々覚えたり、エキサイティングな毎日をご一緒にいます。創作活動の面でもかなり自由が与えられるようになりました。今の状況については非常に幸せだと感じています。いつかは自分のカンパニーをもちたいと思っていますが、今はまだまだ踊っていたい。踊りとは、僕の人生に、この上ない充足感を与えてくれるものなんです」



BOYS DON'T CRY



All About You